

---

# **魔法少女リリカルなのはStrikerS 紅い刃を持つ男**

カンパチ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikerS

紅い刃を持つ男

### 【Zコード】

Z2060BA

### 【作者名】

カンパチ

### 【あらすじ】

機動六課になのは、フュイト、はやての知るある男がやってくる。  
その男が来たことで始まる物語。

## プロローグ（改）（前書き）

はじめまして、カンパチです。

初投稿なんで暖かい目で読んで下さい。かなりのグダグダなのでご注意を。

## プロローグ（改）

【魔法少女リリカルなのはStrikerS 紅い刃を持つ男】  
プロローグ

? ? ? s.i.d e

新歴75年3月

地上本部特務一課部隊長室

「は？・・・・・今、何とおっしゃいましたか？」

「えーと。シユタインブルグ三佐を4円から機動六課へ出向とします。」

「つまり、特務課から新設の機動六課へと左遷ですか？クラン少将。」

俺事、アウル・シユタインブルグは今クラン少将より通達を受けた。（しかし、何か変なことでもしたか？左遷なんて有り得ねえ。）  
そう思つていると

「やだ、あんたみたいな優秀な手駒を簡単に手放す訳ないでしょ。」

「なら、何故。まさか、またゴマすったんですね？」「ギクッ！？」  
（・・・・・この女狐ね。まあ、いつものことだが。）

「ハア。・・・もついいです。でも、理由ぐらい聞いても宜しいですか？」

「Hー。めんど」「殺しますよ。（チャキ）」ハイツ。話すからロー  
エングリンを出せないで～（泣）。

（つたぐ。わいつて話せばいいの。）

「実は、機動六課の後援が教会でね。あのオッサンが反対してね。」

「かなり説明不足ですが、監視役ですか？」

「大正解！！ これでどちらにも貸しをつくれたからハッピーよね  
ー。あと、君ことひてしまこの話で損はしないと思つけどな～。」

（・・・・・・・は？）

side out

なのは side

今、わたしことフロイトちゃんとはやてちゃんは、スバルとティアナ  
への機動六課への勧誘を終えて解散するはずだつたんだけど・・・  
・・。

「なのはまちやん・フロイトちゃん。耳に入れといてほしい話がある  
んやけど。」

「じつしたの？まちやん。急に話しだなんて。」

「実は、機動六課に新しく出向になつた人がいるんよ。特務課から

の人やねんけどな。特務一課のクラン少将直々の推薦なんやで。」

「「えッ！？」「

「どうして、そんなところから。」

フェイトちゃんの言つ通り、エリート部隊の特務課から、しかもあのクラン少将の推薦だなんて。でも、それだけじゃないみたい。

「そんな事よりも大事なことがあんねん。出向していく人物や。」

「その人がどうしたの？」

(特務隊つてとこより大事なところつて。アレ?はやてちゃんなんだか嬉しそう?)

「ふつふつふ。実はうちら皆知ってる人やで。」

(えーと。わたし達が知つていて、はやてちゃんが嬉しくなるほどの人つて・・・)

「まさかっ！？」

「せつ、そのままかや。」

「「アウル(くん)っ！？」

(嘘。アウルくんが機動六課に。)

わたしはアウルくんと久しぶりに会えることに嬉しさを感じた。

「久々にみんな揃つんだね。アウルどれだけ成長したんだろ。」  
（フロイトちゃん。なんだか親の心境になつてるけど、一個下だよ  
アウルくん。でも、楽しみだなあ。）

そんな事を思いながら、みんなで今後のことをついて話し合つた。

side out

## プロローグ（改）（後書き）

エー。かなりグダグダでした。

これから、少しずつ修正していきたいと思います。

次回は、機動六課始動編です。

## 第1話（前書き）

はじめまして、カンパチです。

初投稿なんで暖かい目で読んで下さい。かなりのグダグダなのでご注意を。

修正：2012-1-9

## 第1話

【魔法少女リリカルなのはStrikers 紅い刃を持つ男】

### 第1話

アウル side

「うむか、機動六課つてのは。地上本部からかなり遠いな。なあ、ローエングリン。」

地上本部から40分以上かかるなんて。めんどくせえ。

「やうだな。しかし、お前と話している暇はなやうだ。」

デバイスであるローエングリンがやうやく。

「どうこうことだ?」

「クラン少将からのデータによるともう少しで式が始まるとうだ。」

「おひとーこけね。なら、早く部隊長に挨拶しにいかねえとな。」

「ああ。」

機動六課の隊舎に入ると、ロビーの方でちらほら人が集まっているがまだ少ないようだ。部隊長室の場所が分からないので、近くにいたオレンジ色の髪をした少女に話し掛けてみる。

「すまない。少しいいだろうか。」

「はい。何でしょうか。」

「自分は、今日からここに配属となつたアウル・シュタインブルグ三等特佐だ。部隊長室の場所が分からんので案内できる者はいないか？」

「！？ 特務隊！！ しつ、失礼しました。自分はティアナ・ランスター一等陸士であります。」

まあ、機動課に特務課の人間が来る事が少ないからな驚きもあるとか思いながら話を続けることにする。

「そんな力まなくてもいい、ランスター一士。それで、場所が分かる者はいないか？」

「なら、自分が」案内させていただきます。」

「ああ、よろしく頼む。」

「はい。……」

「いらっしゃります。」「

「ああ、すなまなかつたな。ありがとうございます。」

「いえ。では、失礼します。」

そういうて、ランスター＝士と別れて、部隊長室の前までいく。  
そういうえば、部隊長の名前つて知らないな。クラインさんが「会えれば  
わかる……」なんて言つてたが誰だ？

そう思つているとドアの前まで来てしまつた。  
いけね。切り替えねえと相手さんに失礼だ。  
気持ちを切り替えて、呼び出しのボタンを押す。

「はい。入つてええよ。」

ん?なんだ?

この独特な話し方に聞き覚えを感じつつもドアをスライドさせ挨拶  
をする。

「失礼しま・・・・・。」中に入つて自分は思考が停止してしまつ  
た。その理由だと。中にいた人物が俺のよく知る奴らだったからだ。

「「「久しぶり（だね）（やな）、アウル（くん）。」「」」

「・・・・・・・・・・・・失礼しました。」

「「「ええーっ！？」ちょっと待つて（ちーや）……どうして出て

「…」  
「…」

いやいや、すまないハモりだな。

とシックリを心の中に留めておく。

「何か違つて考へておるだろ。それよりもはやく挨拶しないか。」

ローハングリンに諭され落ち着く俺。何か悲しい。

「すまない。この部隊にお前達がいるなんて知らなかつたからな。つい、驚いただけだ。久しぶりだな、なのは、フュイト、はやて。これからよろしくな。」

「…」

だからハモるなよ。

別のところシックリをこれつつ、久々の再会を喜んだ。

side out

## 人物・デバイス設定 + 用語解説（ネタバレ注意）（前書き）

今後の話しの構想が浮かばないので、先に投稿します。

## 人物・デバイス設定+用語解説（ネタバレ注意）

? 「人物設定」

アウル・シュタインブルグ  
面倒臭さがりな主人公

年齢：18歳

性別：男

身長：174?

髪型：セミロングの茶髪

顔：バランスの取れた中性的な顔立ち

出身世界：?????

所属：特務一課戦闘部隊長 機動六課FW部隊「コールナンバーロン  
グアーチ05

階級：三等特佐（他の三佐とあまり変わらず）

術式：近代ベルカ式主体  
(ミッテ式も一応使えるが滅多に使わない)

魔力ランク：S (リミッター時AA)

魔導師ランク：S -

魔力光：青

### デバイス・ロー・エングリン

好きなもの：麺類、デバイス研究、旅行、友人、家族

嫌いなもの：辛いもの、デスクワーク（苦手ではなくただ面倒なだけ）、人を見下す人

3年前に設立された特務一課の戦闘部隊長に入隊から約1年で上り詰めた男。

二つ名で「マグダナの紅い刃」と呼ばれている。

彼の戦術スタイルによって、ミッド式主流だった風潮からベルカ式を再検討する動きができるほど。

しかし、私生活となると極普通の生活しかしない（何かするのが億劫なだけ）。なのは達とは、6年前の任務で知り合ってからの付き合い。

管理局入局以前の経歴が不明であり、それを知っているのはクランのみ。

### クラン・セアトニック

年齢：25歳

性別：女

身長：156？

髪型：黒のロング

顔：生粋の日本人に見える。しかも、かなりの美人。

出身世界：第1管理世界

“ミッドチルダ”首都クラナガン

所属：特務一課部隊長

階級：少将

術式：ミッド式

魔力ランク：A

魔導師ランク：AA+

魔力光：深緑

デバイス：特務隊制式採用銃型デバイス N-73

管理局内でもかなりの権限を持つ特務隊総司令官。

3年前に特務隊を立ち上げた張本人。管理局屈指の戦略家であり、管理局の腐敗を憂いその優れた知略を使い管理局を変えようとしている。

ちょっとお茶目なお姉さんでアウルをいじるのが愉しみ（？）の一つ。だが、よくアウルにO H A N A S Iを受けているらしい。アウルの過去を知る唯一の人。

## 「デバイス設定」

### ローエングリン

管制人格：男 オッサン

アウルが独自に造りあげた両刃剣型のアームド型インテリジェントデバイス。

通常時の色は灰色だが、剣の内部に魔力流し込み、高速震動させることによって赤く発光し、AMF環境下でもガジェットをいとも簡単に切り裂く事が可能。

更に、剣内部で魔力を圧縮して刃にある隙間から魔力刃を打ち出す事も可能。

完成してから10年も経っていないのにかなりオッサンみたいに達観している。更に、マスターのアウルに人生論を語ったりする。アウル曰く、そんなデータを組み込んだことはないという。

N-73

特務隊制式採用銃型ストレージデバイス。

簡易AIを搭載している。

3つのモードを使用可能。

- ・アサルトモード

連射性能を追求したモードで、牽制用として主に使用される。

ただし、一発の威力が低いうえに誘導性能が全くない為にこのモードのみで戦闘は難しい。

- ・ショットモード

面制圧を目的としたモードで、銃口から20発の小型魔力弾を一斉に発射して相手にダメージを与える。

- ・カートリッジをロードすれば、ガジェット？型でも一撃で破壊可能。
  - ・スナイパー モード
- 狙撃を目的としたモードで、支援能力に優れている。このモードは、連射が可能なのが特徴。射程は500メートル。

### ? 「用語解説」

#### 特務隊

5年前に起きたクーデター未遂事件“マグダナ事件”を背景に3年前、管理世界でのテロや広次元犯罪の取り締まり組織として、クラン・セアトニック（当時、一等空佐）が中心となって設立される。独立行動権や単独調査権、予算請求権、人員徵収権の一部が認められており、かなりの権限を持つ。

現在、まだ一課しか稼動しておらず人手不足が深刻。  
人員は現在80名（戦闘員はうち24名）。

#### マグダナ事件

5年前に第51管理世界の主星“マグダナ”で発生したクーデター未遂事件。

クーデター側として、次元航行艦2隻と魔導師107名が参加。鎮圧側として、次元航行艦2隻と魔導師56名が参加。  
管理局設立以降初の艦隊戦となる。

この事件で、アウル・シュタインブルグ（当時、空曹）は次元航行艦一隻航行不能、魔導師29名撃墜という華々しい戦果をあげ、二階級特進を果たし、「マグダナの紅い刃」と呼ばれる様になる。

## 第2話（前書き）

頑張つて、書いてみましたが、中途半端になつてしましました。

第2話であります。

修正：2012-1-9

アウル side

あれから、感動の再会に漫ることとはできず。すぐ後にやつて来たグリフィス准尉の催促によつて隊舎のロビーで機動六課の稼動式にはやての右隣りに並んでい。

しかし、この部隊は女性が多くないか？戦闘員なんて俺と赤髪の少年しかいねえし、しかも10歳前後とみた。

・・・・・はあ。

上手くやつてけるかねえ、俺。自信ねー。

『何をそんなにじょげてあるのだ？』

ローハングリンが念話で話し掛けてくる。

『だつてよお・・。』この部隊、女性率高すぎだらう。面倒臭そうだ。

『馬鹿者。人脈の狭いハ神がここまで部隊をつくるとこったら知り合いに頼むしかないだろ。』

『分かつてゐわそなことぐらう。けどよ。』

『諦めて慣れるんだな。』

「こいつ、何でこんなに達観してるんだ？」

などと考えていると、はやてが俺の名前を呼ぶ。

「ほな、うひの役目は終らせたさかい。アウル、血口紹介しこ。や。

「こきなり何言い出すんですか、八神部隊長。」

「ええやないか別に。この部隊のなかでアウルだけはみ出しもぐみたいやからなあ。今のうちに顔覚えてもらひ「辞退いたしま」命令や。

「・・了解。」・・・よしつー。」

チクシヨー。新手の嫌がらせか？

『そんな訳ないやん。』

『何故、心が読めるつー。』

『そんなんどおでもええから、はよしつー。』

いやいや、良くないよー。俺ひとつては死活問題ですよー。はやてさんー？

などと考えていたが、隊員の皆さんの視線にたえられず、渋々挨拶を始める。

「えー。皆、初めて会つ者が多いと思う。自分は、アウル・シュタインブルグ三等特佐だ。本日より、特務一課からこの機動六課へと出向となつた。この部隊では、八神部隊長の補佐や高町教導官の補佐つて、補佐が多いがよろしく頼む。」

フーッ。何とかそれらしくなつたぜ。

「何や、案外まともやな。」

「一応、これでも指揮官だったもので。」

などと、はやてと叫んでいたが、いきなり前から声があがる。

「ア・・・アカル・シユタインブルグ！…? “マグダナの紅い刃” !  
!! ビジして、こんなところに…! ?」

「ああ、私はその名で呼ばれているが、その名前は苦手であまり  
ないから知らないと思つたが冷静に対処することにした。

「ああ、私はその名前じつてるんだ？特務隊では、そんなにいわれて  
呼ばないでくれないだうつか？」

「はっ、はいっつ…!」

「うーん。そんなに有名なのか？俺

『なあ、なのは。』

『ニヤツ…! な、何かな？ アウルくん。』

『俺つてそんなに有名なのか？あまり他の部隊に足を運ばないから  
な。わからないんだ。』

『うんつ…! 激しい有名だよ…! テレビや雑誌でよく取り上げられてる  
よ。知らないの？』

『いや、知らないんですけど……つづ……まさかっ……』

『どうしたの?』

『何でもない。ありがとな、なのは。』

『?? ううん。別にいいよ。』

あのヤロウ・・・黙つてやりやがったな。

「ほな、アウルの紹介も終つたからこれで解散な。」

「俺がある女性に怒りを感じているつかこ、はやてが話をしめていた。

「で、これから新人達と顔合わせするわけだが。どんな奴らなんだ? なのは。」

「凄いいい子達だよ。育てがいがって、とても楽しみだよー?」

「…………。」

「どうしたの？急に黙っちゃって。」

「…………余り無茶はするなよ。」「く？」

「だからひつ！？無茶はしないでくれって言つてんだ！……。久しぶりに会つてすぐに倒れられたら面倒臭さいからな。」

「…………ふふつ。」

「何だよ。」

「ん~。素直じゃないね、アウルくん。」

「…………何じやそりや。」

「ふふつ。あつ、あの子達だよFWのメンバー。」

『氣まずい雰囲気（俺的に）の中、なのはが指差した方を見る。確かに4人の少年少女達がいた。なのはがその子達に呼びかける。

「みんな揃つてるかな？」

「…………はいっ！――」「――」

「おっ！――い返事だ。一応挨拶するが。俺はアウル・シュタイン

ブルグ、階級は三等特佐だ。気軽にアウルと呼んでくれ。階級なども付けなくていいぞ。」

「スバル・ナカジマ二等陸士です。」

「ティアナ・ランスター二等陸士です。」

「エリオ・モンティアル二等陸士です。」

「キャロ・ル・ルシH三等陸士と相棒のフリードです。」

「キュクー。」

「スバルとティアナとエリオとキャロとフリードだな。これから一年よろしく頼むな。」

「…………よろしくお願ひしますつ……」

『確かにいい子達だな、なのは。』

『んふふー。そうじょ。』

そんなことをなのはと念話しながら皆で訓練場に歩いていった。

FWメンバーは、訓練着に着替えに行つたんで、なのはと訓練場に来ていた。すると、俺達が来た方とは反対側から一人の女性が走つ

てくる。

「なのはなーん！」

「シャーリー！」

なのはの知り合いでの様だなと思つていたら、FWメンバーもやって来た。

「ちょうどよかった。シャーリー、挨拶お願い。」

「はい。シャリオ・フィーノー等陸士です。気軽にシャーリーって呼んでね。私はメカニック担当なので、皆さんのお練の様子も見させてもらいうからよろしくね。後、デバイスについて聞きたいことがあつたら何でも聞いてね。」

「　　はいっ！」

「アウル・シユタインブルグだ。アウルと呼んでくれて構わない。」

「分かりました、アウルさん。」

「えーと。今返したデバイスには、訓練用のデータチップが入つて

いるから、いつもより大事に扱つてね。」

「 」 「 」 「 」 「 」 「 」

「やー、じゃあ早速訓練始めよつか。」

「あ、あのー。ここでですか？」

「何もないですよ。」

確かにないもないな。こんな所でどうやって訓練するんだ？

「シャーリー。」

「はーい！ステージセット。」

シャーリーが電子端末のボタンを押すと、何もない所からいきなり  
都市が出て来た。

「十九——！」

「スバル、うつさい！！」

スバルがはしゃいで、ティアナは止めてるが、内心驚いてるみたいだ。

スゲエなこりや・・・。こんな所に金使うのかはやてのやつ。自分も内心驚きつつもそれを外には出さない。指揮官になつてからのくせだ。

「しかし、空間シミュレーターとはやめんな。」

「やつでしょ。」Jの部隊の唯一の見所だつてはやてちやんが言つてたよ。」

はやてよ他に見所はつくれなかつたのか？  
そう心の中でききつとも訓練を開始した。

「みんな、準備はいいかな？」

「まじっ……」「」

「うん、いい返事。じゃあ、シャーリーお願ひ。」

「動作レベルC、攻撃精度Dつてとこですかね？」

「そうだね。先ずは軽く8体から。」

「まあ、それぐらいなら大丈夫だらう。」

シャーリーが端末を操作してターゲットを出す。その間になのはが  
解説と。

ガジェット・ドローン。自立行動型の魔導機械で、このタイプは近  
づいてきたら攻撃するやつだ。

さて、皆さんの実力を見せてもらいますかね。

そう思いながら、彼女達の姿眺めていた。 side out

## 第2話（後書き）

次で、初回を終らせたいなどない頭でひねっています。

次回も頑張りますので、是非読んでください。

### 第3話（前書き）

初日終わらなかつた。

では、第3話どうぞ。

修正：2012.1/9

アウル side

ただ今、絶賛新人達の訓練を見ている最中だが、あいつらガジェットの性能を見極める前からバラバラに攻撃してやがる。

初のエリオやキャロなら分かるが、スバルとティアナは幾つか任務をこなしてるはずなのに。

などと考えていると、ガジェットのAMFが作動したようだな。あつ、スバルがビルに突っ込んだ。その後、なのはの説明会があつて皆動き出した様だ。

「みんな、よく走りますねー。」

「危なつかしくて、ドキドキだけどね。」

「全くだ。ティアナは指揮を始めるのも遅いし、纏められてはいるみたいだが。先が思いやられる。」

「そりだけど・・・。アウルくん厳しすぎない?」

「ま、これからビシバシ育てりやいいだけだ。・・・・面倒だ

が。」

「アウルくん。聞いえていいよ~。( || ヽ( ゚ ) )」

「最後のは取り消すから、先ずはそのレイジングハートさんを下ろしてくれないか? なのは。」

いきなりセットアップして、アクセル6個も出すなよ。生身なら、ケガやすまねえよ。

「んもう。アウルくん、直つてないんだねその癖。」

「その癖って、面倒臭さがりな感じですか? なのはさん。」

シャーリーが端末を操作したままなのはに聞いているが、手止まつてないぞ。あれ出来る奴は管理局に何人いるだろ?

・・・・・いたわ、あのいたずら好きな少将が。

「やうなの! ? 知り合つた頃からずっととだよ! ! いつも直してつて言つてるのに、全く直そつしなこの! ? これ、どう思つ? ? シャーリー

ーー」

「い・・・・いや、そんなこと言われても。」

なのはが凄い勢いでシャーリーに詰め寄る。

なのはさーん、今教導中ですよ。あなたが主役デスヨー。

「はつ! ? 今教導中だつたんだ! 」

俺の思いが通じたのか、なのはが復活した。ついに馬鹿になつたか

? なのは。

「アウルくん。後で、模擬戦ね。」

「え?」

「エーーーッ！？」

なのはのいきなり模擬戦発言の説明もないまま、FWメンバーの訓練が終了した。

「お疲れ様。どうだつた? 訓練、厳しい?」

「はい・・・・。」

「かなり・・・・・。」

キヤロとティアナが答える。

まあ、一応アドバイス位いうか。上官だし。

「よしぃ。この模擬戦を見てみて、言いたいことがある。聞いてく

れ。」

「「「「はいっ……」「」「

「先ずは、スバルとエリオだが。攻撃が直線的過ぎる、もつ少し考  
えろ。後、スバル。指示もなしに動くなよ、部隊が混乱する場合が  
あるぞ。」

「は・・・はい。」

「頑張ります。」

「次に、ティアナとキャロ。周りをよく見て行動しろ。センターと  
バックは状況判断力が重要となる。以後、このことを心に留めてお  
け。」

「はい・・・・。」

「有り難うござります。」

「・・・・まあ、新人にしては上出来だ。まだまだ、成長出来る  
と断言してやる。励めよ。」

「「「「ツー?は・・・はいっつ……」「」「

「うん。みんなの改善点も分かつたことだし。もう一戦いきたい  
けど・・・。アウルくん。」

「なのは、ホントにやらないといけないか?」

「うんっ！――みんなの勉強にもなるしね！」

ダルいんですけど！！

「なら、なのほがやればいいだろ。」

「フーン。あの時言ったことは嘘なんだ!」

「やれぱいーんだ!!」

「じゃあ、みんな休憩ね。アウルが模擬戦するから、見学だよ。あ・  
・でも、後でレポート提出だよ?」

「エエツ！？」

「アウルさんが！？」

「マグダナの紅い刃の実力を見れるんですかツツ！？」

卷之三

・・・・・ そんな輝いた目で見るな。泣きたくなるだろ？

「アカルくん。準備はいいかな？」

「ハイよ。じゃあローハングリン、頼むぞ。」

「心得た。」

「セットアップッ！…！」

そういうて、バリアジャケットを展開する。因みに、俺のバリアジャケットは黒のロングコートに黒のズボンで、腕には赤いラインが入っている。ほぼ、黒一色だな。

次にローハングリンは、今はただの灰色の剣だ。

「こちらは準備完了した。始めてくれ、なのは。」

「分かった。じゃあ、ガジェットは20体、動作レベルB、攻撃精度Bだよ。時間は10分以内！！」

「了解した。」

俺が了解の意思を表示すると、ガジェットが出て來た。

「それじゃあ、レーティー・・・、『一ツツ！？』

なのはの合図で、俺はガジェットの群れに向かつていった。

s i d e o u t

ティアナ side

アウルさんの模擬戦が始まった。なのはさんが言つていたことには、あのガジェット達は自分達の時よりも動きや攻撃のレベルが上がっているらしい。

すると、アウルさんのデバイスが赤く発光し始める。

「赤くなつた！？」

スバルが驚いてるけど、その人の一つ名知らないのかしら？

バカッツ！！スバルのことはいいから集中しなきやー！？

（酷いよ、ティア～。）

？何か聞こえた気がしたけど。きのせいね。

などと考えているうちに、アウルさんが纏まつてゐる3体を両断して、さらに近くにいた1体を“ソニツクムーブ”を使って移動して突き刺す。

続いて、彼はガジェットを刺したまま剣を振るう。すると、魔力刃が飛び出して刺さつていたガジェットを切り裂いてその先のガジェット2体をAMFを貫通して切り裂く。

そして、そのままガジェットの集団に飛行魔法を使ってガジェットの攻撃の雨を普通では有り得ない動きをしながら回避しつつ、接近していく。

「な、何ですか！？あの動き！…」

「身体の向きを変えずに進行方向を変えるなんて…！…！」

「あの攻撃の雨を障壁無しで！？凄い…。」

「ふえーーーっ！？」

みんなが驚嘆の声を上げてゐるけど当たり前だわ。私だって夢を見ているみたいだもの。

「はじめて見た人はやっぱり驚くよね。アウルくんの動きは。」

「なのはせさん。アウルさんはどうしてあんな動きが出来るんですか？」

「うーん。後でアウルくんに直接聞いた方がいいと思つよ。」

そんなやり取りのなかもアウルさんはガジェットを次々撃破していく。

やつぱり、凡人は私だけ……でも、強くなつてみせる……私の夢の為にも！？

私は、そう誓いながらアウルさんを見ていた。

side out

アウル side

「ローエングリン。あと何体だ？」

「8体だ。あと1~2秒しかないぞ。遊んでないではやくやれ。」

「分かりました・・・よつ！？」

ローエングリンと会話しながら、ガジェットの群れの中を飛び回り2体撃破。

「さてと、仕上げとこぐれ。カートリッジロード。」

〔ライザーモード……〕

カートリッジを2本ロードして、ローハングリンに魔力を溜める。

「“ディメンジヨンライザー”……？」

ローハングリンから巨大な魔力刃が現れ、ガジェット4体を飲み込み破壊する。

「イックー！ ローハングリン！ ？」

「ワシを投げるなー！」

ローハングリンを投げて、残り2体のうち1体に刺さる。隙だらけな俺の後ろからガジェットが攻撃してくる。

「隙だらけだー！」

しかし、俺は攻撃を瞬時に回避してガジェットを瓦礫へ蹴り落とした。瓦礫に当たったガジェットは爆発した。

「ミッションコンプリートだな。」

「相棒をちゃんと扱え、この馬鹿者がつー！」

さりげなく、ローハングリンは回収している。

「アウルくん！戻ってきてー！」

「了解。」

「後で説教だな。」

「面倒臭さいので却下。」

そんなやり取りをしつつ、なのは達の所に戻る。

「 「 「 「 「 憂いですよアウルさんっ！――・？」」」

「ウオッ!?」「いやはは・・・。」「

帰ってきていたなりの出向いに俺は驚き、なのはは苦笑いしている。

「 もう少しで、あんな動きしてくるんですか？」

エリオが質問

「ああ、ただ魔力の放出方向だけを変えているだけだ。ただ、今の所はデバイスでは再現出来ないから自分で演算処理しないといけないな。」

「どうして、剣が赤く光つたんですか？」

キヤ口が質問。

「内部に魔力を流して高速振動させてるんだ。切れ味も3倍向上す

るが。」「

「今度、回避の指導して下せーーー！」

スバルが懇願。

「先ずは、防御に力を注げ、それからだ。」

「デバイス、バラさして下さいーーー！」

シャーリーが懇願。

「却下。」

最後は何なんだ？

「ケチーツツ！？」

シャーリーの事は放置した方がいいな。

「これでいいか？」

「うん！有り難うアタルくん。」

「じゃあ、後はなのは任せるわ。俺は、事務作業してくる。」

「わかった。じゃあねー。」

「……あー。なのは。」

「どうしたの?」

「お前の分もやつとくから、終わったらすぐ休め。」

「え?でも……。」

「教導する側も疲れるからな。ここからを万全な状態で教えてやつてくれるか?」

「じゃあ、お願こするね。」

「任せられてー。」

「……（ボソッ）素直じゃないんだから——」

何か聞こえたか?

そう思こつつ、隊舎に戻る——とする。

『やはり、説教だな。テーマは、" 鈍さ" だ。』

『何言つてんだ?』

ふと、ティアナの方に目がいった。彼女はすっと下を向いたままだ。  
声、かけとくか。

「どうした、ティアナ?」

「い、いえ。何でもありません。」

「…………。力が欲しいのか？」

「！？」

「ま、いいけどな。」

「…………は？」

「ひとつだけ忠告だ。焦つて力を手に入れようとすると、闇に引きずり込まれるぞ。それだけだ。」

「アウルさん？」

「じゃあ皆、しつかり訓練に励めよ。」

「「「はーーー」」」 「…………。」

さてと事務作業するか。

「ローエングリン、頼んだぜ！－！」

「自分でやれ。」

### 第3話（後書き）

旗建てるの難しいです。

次回で初日終わらせる予定です。

## 第4話（前書き）

やつと初田終了です。

長かった。

では、第4話です。

どうやー。

アウル side

隊舎に戻った俺は、事務作業をしながらローハングリンクとさつきの俺の模擬戦について話している。

「やつぱり、コモリスターをかけられると速さや技の威力が落ちるな。」

「ヒランクからAAまで落としてるからな。お前の味が無くなっている。早急に対策が必要だな。」

「ちょっと待ってくれるか？新しいやつきたから。先に処理する。」

〔話を聞くかんか！？〕

「うむ。早く終らせてしまんだよ。めんどいから・・・・。」

こんな風に話を無理矢理中断させながら、作業を進める。

「対策はフュイトやシグナムに相談した方がいい。あいつらと俺は戦闘スタイルが似てるからな。」

「うむ。よからう。」

「よしつ！…事務作業終了だぜ！…案外少なかつたな。予定より早い。」

11時から始めて、今はもう15時だ。腹減った。

「相変わらず凄い集中力と処理能力だな。ここにいる奴らの2倍以上だぞ。」

「そうか？」

嫌いだから早く終らせる為に処理速度は上げてるが、そこまでなのか？

「それよりも、早く食堂に行って何か食つもん貰おうぜ。腹へったぞ。」

「先に処理した書類とデータをグリフィスの所へ渡しにいくぞ。」

「わかったよ。」

「グリフィス准尉。」

「どうかしましたか？シユタインブルグ三佐。」

「ああ、俺と高町の分の書類終らせてから持つてきた。確認頼む。」

「HHH…あれ2日分あつたんですよー！」

「はあ！？あの量なら特務隊の時の一日分だぞ。」

「4人分の仕事量を一日で…。」

「ちゃんと渡したぞ。…。後、俺の事はアウルでいいぞ。」

「は・・・・はい。了解しました。」

（誰が狸や！？）  
ん？幻聴が聞こえた様な…。まあいいぞ。

「じゃあな。…。今度、ヴァイスと飲みにいくぞ。命令だ。親交も大事な任務のひとつだ。」

「は・・・・はあ。」

早く食堂行こう。腹減った。  
そう思い。食堂へ歩を進めた。

食堂に着いておばちゃん・・・いや、綺麗なお姉さんから食事を受け取つて、適当に空いてる席に座る。

因みに、今回はフォーという米粉を使ったヘルシーな麺料理だ。

「ウマイシッ！？」せつぱり、麺はいいよな。」

「おぬし。麺類以外食わんのか？」

「もうひとつ……。」

「・・・何も言えんな。」

ローハングリンの愚痴を聞き流しつつ麺を啜る。

「あつ、アウル。こんな時間に食事？」

「ん？ああ、フロイトか。そんなお前も今からか？」

「うん。地上本部で機動六課の設立理由の説明でね。はやてと行ってきて、執務官の用があるから先に帰ってきたんだ。」

「はやてはまだ挨拶周りか？」

「うん。夜遅くまでかかるみたい。」

「はあ。頑張りますな、はやてさん。俺、ぜつて一めんどいからちやつちやと済ませるわ。」

「アウルは少し真面目になつた方がいいと思ひよ?」

「聞こえんな。それよりも、早く飯取つてここよ。食堂に来ておいで、何も食わないつもりか?」

「もつひ、つれないな。待つてて、食事持つてくるから。」

「それで、アウルはどうしてこんな時間に?まだ、訓練の途中でしょ?」

「ああ、めんどうからなのは任せた。」

「バルティッシュ (チャキ)。」

「冗談だつて。事務作業をしてたんだよ、ついでになのはの分も。俺は中途半端な立場だからな、色々あるんだよ。」

「アウル。それは本当なの?」

「何か、信用されてないのか?俺。」

「だつて、アウルつてとっても面倒臭さがりなんだもん。」

「仕事でそんなしねえよ。」

「これまで面倒臭さがりだと思つてんだ？」

「後で、グリフィスに確認しないと……。」

「…………。」

何かある意味信用されてるみたいだな。泣いていいですか？（一本

田）（田度田）

side out

フェイタside

「だ～か～ら～！仕事をサボつたりしねえつて！？信じてくれよ  
」。

うーん。アウルって、サボつてそんな感じなんだよね。まあ、今回  
はいいかな。

「わかった。アウルを信じる。でも、サボっちゃダメだよ？」

「わかつてゐつて。」

「でも、本当に久しぶりだね。心配したんだよ？何年も連絡くれないし。」

「悪かったな、特務隊の任務が忙しかったから連絡寄越す暇がなかつたんだよ。お前らの事忘れてた訳じゃないんだが……本当にすまない。」

そういうて、アウルは腰まといを正して頭下げる。

「ええっ、い・・・いこよ。頭上げて、アウル。」

ビーハー、ビーハー時だけ真面目なのかな。

いつもちやんとしつれれば、カッコイイのにな。。。

「何か言つたか？」

「！？　う、ううん！…何でもないよ！—————」

「そいか？ならいい。」

声にでてたの！…恥ずかしいよ～！／＼／＼

「まあ、ここに来れてよかつたよ。びっくりしたんだぞ！…！お前ら3人揃っているだからよ。」

「！」めん。はやでがビーハーしても驚かせたかったらしくて。セアトニー

ツク少将とも話してたし。」

「あの狸め。普通に出迎えられるのか。」

「そうだね。」

(だから……誰が狸やねんひめひめかひーーー)

!?.はやての声?

「なあ、フハイト。なんかはやての声が聞こえた様な気がするんだが。」

「え、氣のせいだよアウル。はやはては地上本部にいるだよ。」

「やつか?ならいい。」

はやての声が聞こえるなんて、疲れてるのかな?

side out

アウル side

フェイドと別れて自室に戻った俺は、ローハングリンのメンテナンスを兼ねて改良しようと思いデバイスルームにやってきた。

「あれ？ アウルさんじゅないですか。 デスクワークはもう終わったんですか？」

「シャーリーか。 ちょっとローエングリンのメンテナンスも兼ねたシステムの調整にここ借りてもいいか？」

「エエッ！ ？ アウルさん、 デバイス調整出来るんですか！ ！」

「オイ、 これでもデバイスマスター資格一級持つてるし。 ローエングリンを造ったのは俺だ。」

「……………。」「……………。」

「シャーリー？」

「一緒にやつてもいいですかっ！ ！ ！ ？（メラメラ）」

「なつ・・・・・？ シャーリー、 何か怖えぞ。

「いいですよね！ ！ 後、 FWのみんなの新デバイスも一緒に造ってください！ ？ お願いしますよ！ ！ ！」

シャーリーが詰め寄る。俺は、既に壁まで追い込まれている。

「逃がしませんよ？ ハアハア・・・・。」

イ・・・イヤー

午後10時30分

「・・・・・はあ。」

「ワシが眠っている間に何があつたんだ？」

「聞かないでくれないか。思い出したくなえ。」

今度デバイスルームに行くときはストッパーを連れて行こう。そう、心に誓いながら、腹が減つてるので食堂に向かう。

「ん?なんだ、アウルじやねえか。」

「ああ、シグナムと訓練やつてたらこんな時間になつちまつた。」

「（「ソラ）それは大変でしたね。あの人との模擬戦は疲れるでしょ？」

「（「ソラ）全くだ。」

「聞いえてくるが、2人とも・・・。」

（（ベクツー♪））

「はあ、早く食堂に行くな。シャマルとザフイーラを待たせても悪いしな。ショタインブルグも食事だらつ？一緒にどうだ？」

「はい。喜んで。」

食堂に着いてヴォルケンリッターの皆さんと一緒に食事をとつてみると。はやてが帰ってきた。

「・・・・なんや、アウルもいたんかいな。」

「どうしたはやて？俺がなんかしたか？」

「何でもあらへんよ。（狸つて言われた気がするなんて言へん）」

「疲れてるんでしょ。今日は早くお休みになられた方がいいのですか？主はやて。」

「やうやくさせてもらひつわ。挨拶周りはしだりかつたさかいな。」

「なり、明日ははやての仕事を手伝つか。明日の分の仕事をはせたし。」

「ええよそんなん。」

「久しぶりに話しもしたいしな、気にすんな。お前は殆ど全部自分で抱えやがるからな。心配してる身になつてみろつてんだ。」

これはなのはやフュイトにも言えるが、コイツは特に厄介だ。

「・・・当たり前だ。」

真剣な顔で答える。大事な友人だからな。

—  
—  
—  
—

すると、はやての顔が赤くなる。熱でもんのか？

「じゃあ、早く寝ろよ。明日も朝早いぞ。お先に失礼します。」

飯を食つた俺は早く寝ることにした。今日は、色々あつたからな。

はやて。s.t.u.e

「ウウー。あやこでの顔は卑怯やないか。  
何でああいつ時だけ真面目になるんや?  
更に、あいつはその気がなこときてるし。。。

「はやてちやん。」「はやく。」「はよ。

「な、なんや?」

「」「頑張れ(つひ)(ひひきなこ)。」「

「・・・・・・。」

何で慰めらやなアカンねーーん!?

s.i.d.e.out

## 第4話（後書き）

ヒロインとして、なのは、フュイト、はやてを決めました。  
他にも絡ませたいけど……今の実力では。

## 第5話（前書き）

ファーストアラート前のお話です。

後半は、ヴァイスとグリフィスとの絡みになります。

では、第5話です。

じつね～。

アウル side

「準備はいいか？ シュタインブルグ。」

「いつでも構いませんよ、シグナムさん。」

「なら、いくぞっ！」

機動六課設立から既に1週間がたつた朝。俺とシグナムさんは、既に日課になってしまった早朝の鍛練（無理矢理やらされている）をやっている。

ほぼ模擬戦みたいだが、訓練場の1／4のスペースを借りているので大丈夫だ。

「ハアッ！！」

俺は、シグナムさんに“ソニックムーブ”で接近してローエングリーンを振り落とす。

しかし、それはシグナムさんに届く前に居合で俺は切られる。が、俺の姿は霧散した。

「“フェイクシルエット”か。やる・・な！」

そういうながら、シグナムさんはレヴァンティンを後ろへ振りかざし、背後から斬りつけに来ていた俺と切り結ぶ。

「いやー、さすがシグナムさん。戦いがいがありますね。」

「ふ・・・よく無い。」

鎧ぜり合ごとを止め、両者距離をとる。

「レガランティン！！」

「ローハングリン！！」

2人同時にカートリッジをロードする。

「紫電・・・・。」

「風刃・・・・。」

「「一閃つ！？」」

2つの斬激がぶつかり合い、視界が奪われる。

その間に、俺は地上にある木を2・3本切り倒して束ねてから空に戻る。

視界が晴れると、シグナムさんは既に攻撃の体制を整えていた。

「飛竜・・一閃つ！」連結刃が俺の下に迫る。

しかし、俺は束ねておいた木を迫る連結刃の中へ転送させる。

「つな・・・・！？」

「ウオオーツ！！」

驚くシグナムさんをよそに斬りかかる。

「クツー!?」

だが、シグナムさんも木を切り裂き自分の下に戻すが、それより早く接近する。

「・・・・!?

鞘を使って防ぐとするシグナムさんだが、また俺の姿が霧散し、首筋にローハングリンが突き付けられる。

「また“フュイクシリエット”か。・・・・私の負けだな。」

「フウ。これで3勝1敗ですね、シグナムさん。」

「また負け越したが、明日は負けんぞ。」

『アウルグーン、シグナムさん。一度みんなで集まひつ。』

「なのはが呼んでますんで、行きますか。」

「そりだな。」

集合場所に戻ると、FW達が疲れて座り込んでいた。

「何だお前ら。それで今日の訓練やつてけんのか？」

「あ、アウルくんお早づ。今日はどうだった？」

「「「「お・・・お早づでありますーー！」」」

「ああ、お早づ。俺の勝ち越し。伊達に特務隊の戦闘部隊長やつてなかつたつての。」

「ああ、6年前と比べものにならんな。」

「お褒めにあずかり光栄ですが、まだまだだと考えてています。」

実際に課題が山積みだからな。

「どうして、アウルさんはそんなに強くなりたいんですか？」

スバルが質問していく。

・・・・・強くなりたい理由・・・か。

side out

なのは side

「どうして、アウルさんはそんなに強くなりたいんですか？」

「理由……ね。」

スバルの質問にアウルくんは何かひつかかるみたい。

「自分も聞きたいです。」

エリオも同じ男の子だからかな？ 何か期待してそう。

「強いて言つなら、償いだな……。」

「償い？」

キヤロが不思議そうに聞いている。

「ああ、その為に管理局を善くしたい。だから強くなる。そうすれば……あいつらも喜ぶ。」

最後のは聞こえなかつたけど、アウルくん何だかいつもと違つて悲しい顔をしている。

「そんな事より、午後の訓練は俺だぞ。みつちり、指導してやるからな。覚悟しろよー！」

「アウルさんの鬼ーーー！」

「バカツ！？スバル！」

「ほつ。ナカジマ一士は余程訓練が楽しみらしいな・・・・。」

「えつ？」

「全員、俺と模擬戦5連戦だつー?」

「イヤ——ツー?」

「Jのバカスバルツー?私達を殺す氣ー!」

「(ガタガタガタガタ)・・・止めて下せい。来ないでーーー! ウア  
アーツー! ?」

「ズルイぞつー!私は1日1回なのにつー!」

アウルくん。それはやり過ぎだと思うの。スバル達と模擬戦やつて  
る時のアウルくん恐いの。後、シグナムさん。どうして羨ましげに  
みんな見てるの?

「変更は無しだ。愉しみ(?)にしていろぞ。」

「「「「うわーーん(泣)」」」

みんなが泣くなか、アウルくんは隊舎に戻つていぐ。

「高町。あいつは何か私達に隠してるみたいだな。」

「そつ・・・・みたいですね。」

アウルくん。一体君に何があつたの?『気になつたりやつり・・・・・。

side out

アウル side

午後の訓練でF Wメンバーの指導(といひ名のシゴキ)を終えて今はクラナガンのある居酒屋にヴァイスとグリフィスを連れ来ている。因みに訓練終了時になのはに“ディバインバスター”をゼロ距離で撃たれた。・・やり過ぎらしー。

「それにしても、男だけなんて久しぶりだな。」

「そうですね、アウルの田那。」

「ヴァイス、その呼び方止めてくれないか?」

田那って、俺はまだオッサンじやねえし。

「んじゃ、アウルの兄貴で。」

「・・・・・好きにしゆ。」

「ん?ビうしたんすか、グリフィス准尉?ずっと黙つたままで。」

「えーと。いつも所は滅多に来ないので・・・。」

「まあ、慣れろ。これから、付き合いで行くよつてなるからな。」

「はい・・・・。」

「それよりも兄貴！？」

「どうした？ 急に真面目な顔いやがつて。」

「どうやつて、あの隊長達とあそぼで仲良くなれんすかっ...」

「お前も仲良いじゃねえかよ。」

「違ひます。俺は仕事関係の話とか少し世間話あるぐらい二つですよ。」

「自分もそうですね。それに、八神部隊長とお話をされる時によくアウル三佐の事がでますよ。」

「力ア～ツ！？管理局三大美少女達と仲良しな男は兄貴ぐらいつすよ！羨ましすぎるーー？」

「三大美少女？」

「フロイトさん達の事ですよーー。管理局員ならみんな知つてますよ

!

「仕方ねえだろ。特務隊は、年中無休で管理世界飛び回ってんだ。

世間にも疎くなるんだよ。」「

休暇貰つても次元航行艦の中とか、臨時出動とかあるから基地の中にいたし。

「後、俺以外にも仲良い男ならクロノさんとかコーノとかいるだろう。」

「いや、クロノ提督は奥さんいらっしゃいますし。コーノさんはアルフさんと付き合つてゐるじゃないですか。」

「何つ！ コーノとアルフが！？」

クソッ！？俺だけ独り身かよ！

「それよりも、何かきつかけでもあつたんすか？」

「ん~。初めて会つたのが、6年前の次元犯罪組織の検挙任務の時じゃなかつたかな。あの時はあいつらをただの上官だと思ってたら普通に敬語使つてたな。」

「へえー。それからのお付き合いなんですか？」

「ああ、それから半年はアースラに所属していたからな。・・・ずっと何かしら付き纏われてたな。朝起こしにくるわ、一緒に訓練をしようつて自主練邪魔するわ、部屋が汚いから掃除するつて言って私物を漁るわ、折角休みだつてのに無理矢理買い物に付き合わされるわ、それから・・・・・。」「

「もういいっす。十分、貴方が幸せだったことはわかつたっす！…」

「オイ、俺の話のどに幸せを感じる所があるんだよ。面倒臭さ過ぎるだろ、こんな事されたら。」

「ウルサイイッ！？独り身の気持ちなんてあんたにや分からんよつー！」

「グリフィス、ヴァイスは氣でも狂つたか？」

「…………え？ええ、まあ、そりなんじやないですか。」

『グリフィス！（怒）』

『ダメですって。』の人は半端な事では氣づきませんって。』

「何、念話なんてしてんだ？」

（（そんな事は氣づくのかーー。））

「で、でも隊長達と仲がいいのは事実なんですよね。」

「まあな。数少ない親友だつてのは確かだな。」

「それ以上の関係はないんすか？」

「…………（ボソッ）こんな奴でいいわけがねえよ。」

「どうかしました？」

「いいや、何でもねえ。3年も会ってなかつたから、まだわかんね。それより、お前らはどうなんだ?」

あんな良い奴らと俺が釣り合いつて訳ねえのにな。

『あいつらなら大丈夫だと思つぜっちゃんを受け入れてくれるはずだ。良い奴らだしな。』

『良い奴らだからだ。そこにつけ込んだみたいでいい気分がしねえし。それに、俺の夢にあいつらを利用する氣はねえ。』

『全く、頑固じやの。』

「ヨシ、飲むぞ……奢るからお前のもドンドン飲めよー。」

「いいんすか!…?」

「有難ひついります、アウル三佐。」

「その代わり、お前らも教える。気になる奴いるだろ?」

「自分はまだ仕事に慣れてなくてまだ……。」

「俺はもううんフロイトさんで!」

あの笑顔に騙されたくちか……。フロイトは誰にでもあの笑顔を向けやがる。最初は騙されかけたからな……。誰があんな純粋なまことにしたんだ?

「ヴァイス、お前は無理だ。あいつは特に。」

「無理だと思いますよ。」

「やつてみなければわからんつー?」

そんな会話をしつつ、改めて自分の存在を確認した。

s i d e o u t

## 第5話（後書き）

次回は、ファーストアラート編に突入したいと思っております。

ご覧になつてください。

## 第6話（前書き）

リニア・レール編についてに突入！

今回は、出動までのお話を。

では、第6話です。

えいわー。

## 第6話

アウル side

機動六課始動から2週間経った朝、シグナムさんとの日課の鍛練を終えた俺は、別の管理世界での任務に着く準備をするシグナムさんと別れてなのは達の訓練を見に来ていた。

「おっ、あれはシユートイノベーションか。アクセル10個とは、昨日より2個増えてるな。」

「そのようだな。」

ん？スバルへの支援が遅いな。ティアナのアンカーガンもうダメか？

「ほれ、終わつたようだぞ。」

「最後はエリオか。40点つてここだな。実戦に出ても大丈夫そうだ。」

「相変わらず厳しいな。」

「それが上官つてもんだよ、1人位必要さ。」

などと話しながら、なのは達の下に移動する。

「アツ・皆、訓練お疲れさん。」

「「「お疲れ様です…」「」「」「」

「アカルくん！お疲れ様。」

「皆、大分良くなっているがまだまだ、これに驕らず訓練に精を出して欲しい。」

「「「はいっ…」「」「」

「アカルくんは相変わらず厳しいよね。」

「厳しい上官が居ないから仕方なくな。」

「「やは…」

「キューク~。」

「ん？フリードが何か変だな。それに…。

「スバル、ローラーから煙りでんぞ。」

「え？わあーあちゃー。無茶させちやつた～（泣）」

「どれ、みせてみる。」

うーん。駆動回路が焼き切れてて、他のパーツも損耗が激しい。よく動いてたな…。

「」いや、ダメだな。もう寿命だ。」

「そんな（泣）」

「うーん。ティアナのアンカーガンも結構厳しい？」

「はい・・・騙し騙しです。」

「じゃあ、実戦用の新デバイスに交換かなー。」

「新・・・」

「デバイス・・・ですか？」

「まあ、そろそろだとは思つてたが。いいのか？なのは。」

「うんっ！もうみんなも大丈夫だよ。アウルくんも心配症だなー。」

「それなら、善は急げというしな。午前の訓練を終わらせて、皆で取りに行くか。」

「じゃあ、シャワー浴びたら着替えてデバイスルームに集合ね。」

「」「」「はいっー。」「」「

「あの車って・・・。」

皆で隊舎に戻つてると前から一台のスポーツカーがやつてくる。

「八神部隊長！？ フェイトさん！？」

車に乗つていた2人にキャロが驚いた様だ。

「それ、フェイトさんの車だつたんですか？」

「うん。地上での移動手段なんだ。」

「お前、スポーツカーなんて買ったのか。」

「運転もしやすいし燃費も意外といいか、これにしたんだ。」

『因みにいくらだ？』

『 だよ。』

『案外、安いな。』

『でしょ。』

「つむ・・・ 最近休みも増えたし、一度見に行つてみるか。

(注意：フェイトさんの車は、普通の管理局員の給料3年分です。)

「それより。みんな訓練頑張つてるか？」

「ええと・・。」

「頑張ります・・・」

「『めんね、エリオ、キャロ。私がライトニングの隊長なのに・・・訓練全然見てあげられなくて。』」

「そんなつー」

「大丈夫です。」

「そり・・ならいいんだ。」

エリオもキャロもまだ甘えてりやいいのに、フェイトがあらぬ誤解をしてそうだ。・・・面倒臭さ。俺に相談に来るな、確實に。

「それで、はやてちやん達はどうかにお出かけ？」

「ちよっと六番ポートまで・・・。」

「これからカリムと会談や。」

「ん? グラシア少将とか? なら、クランさんがようしへ言つてたと伝えといてくれ。」

「ええよ。」

「私はお昼前に帰つてくるから。お昼は、みんなと一緒に食べようか。」

「「「「「はいっ! - (うさつー...)」」」」

「ほならなー。」

はやてとフロイトと別れた後、訓練報告書作成してからテバイスルームになのはと来ていた。既にテバイスの受け渡しは終わってるみたいだな。

「「めんね。遅くなっちゃった。」

「遅れですかない。」

「なのはさん。アウルさん。ちよつびトバイスの説明に入るといふです。」

「アウルせーん。」

リインが俺の肩に乗つてくれる。

「リイン。何故、俺の肩に毎度の如く乗るんだ?」

「アウルさんの肩は座り心地がいいからですよー。」

「ムツ・・・・。」

呆れた理由だな。ん?何だ?急に寒気が。

『アーヴールくん?』

『どうした? なのは。』

『別に。(リイン、羨ましいな。あんなにアウルくんの側について。)』

『体調悪いのか? 何かあつたら言えよ。』

『うん。(本当に鈍感だよね。心配してくれるのは嬉しいんだけど。)』

「出力コミッターって、なのはさん達のデバイスにも掛かっていますよね。」

なのはと念話してたらティアナが質問してきた。

「うん。でもまあ、私達は本人にも掛かってるんだよね。」

「ええっ! ?」

「コミッターですか! ?」

「そうだ。部隊長と隊長と副隊長達と俺に掛かってるぞ。スバル、能力限定って知ってるか?」

「ええっと……。」

「いやほほ。部隊の魔力の総保有量って決まってるでしょ。だから、

優秀な魔導師をたくさん集めたい場合は、本人にリミッターを掛けて規定内に収めるの。」

「裏技だけどな。特務隊は使わないけどな。」

「何ですか？」

「特務隊には人員徵収権の中で能力限定は適用外だからな。勉強になつたか? キヤロ。」

「有り難いござります。」

「それで、なのはさん達にはどれくらいランクを落としてるんですか?」

「私は2・5ランクダウンでAAだよ。アウルくんは?」

「俺は2ランクダウンでAAだな。」

「はやてちゃんは4ランクダウンですよ。」

「4ランクダウンって事は、部隊長はS5だから……。」

「Aランクまで落としてるんですか? -?」

「はやてちゃんも苦労してるんですねー。」

指揮官は前線には基本出ないから困らんと思うが。

それから何故リミッターについて話してんだ? -しかも暗くなつて

やがるし。

などと思いながらもリミッターの解除の方法や午後からのデバイス調整の話しをしていくと。

「ヴィーーッ！ ヴィーーッ！

「このアラートは！」

「一級警戒態勢！？」

「グリフィスくんっ！..」

「はい！ 教会本部からの出動要請です！」

レリックか！？ クランさんからの情報より早い！..

「なのは隊長、フロイト隊長、アウル副部隊長、グリフィス君！ こちらはやで。」

「ひづらフロイト。 . . 状況は？」

「教会調査団がレリックらしき反応を見付けた。場所は、エイリム山岳丘陵地帯！ 対象は、リニアレールで移動中。」

「移動中って……」

「まさかっ！？」

「ジャックされたか。ガジェットの数は？」

「車内に最低でも30体。他に大型や飛行型も来るかもしねん。」  
大型がいたら、今の新人達では抑えらんな。

「いきなりハードな出動やけど、なのはちゃん、フヨイトちゃん、  
アウル・・いけるか？」

「私はいつでも。」

「私も。」

「俺もだ。」

「スバルにティアナにリオにキャロ。みんなもいけるか？」

「「「「はいっ！」」「」」

「いいお返事や。シフトはAー3。グリフィスは隊舎で指揮、リイ  
ンは現場管制！」

「「はいっ！」

「アウルには、現場指揮をお願いするな。」

「了解しました。」

俺ははやてに敬礼をする。任務時は、仕事モードに切り替えるのが  
俺流だ。他は・・・面倒だから。

「ほんならっ！機動六課、出動や！」

「了解！！（一斉に）」

こうして、機動六課始動以降、初となる実戦に出動することになつた。

新人達の訓練不足はいがめないが、やるしかないだろう。

side out

## 第6話（後書き）

ネタが案外思い付かなくなつてきましたので、投稿が少し遅くなる  
と思います。

しかし、読んで下さつていてる皆さんの為にも投稿は続けていきます  
ので、よろしくお願いします。

## 第7話（前書き）

投稿が遅くなつてすいません！

今回で、リニアレーる編終了です！最後には、少しあの人も初登場します。

では、第7話です。

どひそー。

## 第7話

アウル side

現在、俺達はエイリム山岳丘陵地帯でガジュットにジャックされたリニアレールにへりで移動中だ。

「高町はスタートを指揮して前方から、俺はライトニングを指揮し後方よりレリックを目指す。リインは俺達が突入後、リニアの制御システムの奪還を行つてもらひ。」

「「「解!」」」

「初の実戦だが、なあに何時もの訓練通りにやればいい。お前達の活躍、あてにしている。」

「「「「はいっ!」」」

「レーダーに熱源多数接近してあるぞ。」

「何! 新手か。タイプと数、分かるか?」

「高速で接近してある故、飛行型じゃな。数は20の編隊を3つ確認した。もうすぐ、観測隊も捉えるじゃん!」

『飛行型出現! 現地観測隊を捕捉!』

「凄いんだね。ローエングリンって。」

「まあ、4つの簡易AIと高度AIで構成されてるからな。」

「ふえ～。その大きさで・・・有り得ないよ。」

「それより、作戦変更だ。高町と俺は制空権を確保に向かう。後は変更無しだ。少し厳しいが、増援の恐れがある。心してかれ！」

「「「「はいっ！」」「「「「はい。」」」」

キヤロが不安な顔をしている。少し落ち着かせるか。

「キヤロ。」

「は、はい。」

「自分の力が怖いのか？」

「つー？・・・はい。」

やはりな、キヤロはフェイトに保護されるまで皆にその力を恐れられていたとフェイトから聞いていた。

「キヤロ。聞いて欲しい事があるが、いいか？」

「はい。」

許可をもらつたので、キヤロの近くまで行く。

「力はただ力だ。それは、変えようがない。正直、キヤロが自分の

力を怖がるのも分かる。俺もそつだからな。」

「アウルさんも・・・ですか？」

「ああ。でも、その力は人を傷つける事も出来るし、人を守る事も出来る。」

「人を守る・・・。」

「そうだ。だから・・・。」

そつ言いながら、キャロの頭を撫でる。

「あ・・・。」

「こ」の任務では、俺は一緒に行けなくなつたからエリオを守つてやつてくれないか？こいつ、俺の訓練では一番によくやられるし。」「アウルさん！！それは一番に僕を狙つてくるからですよね！」

「あははは・・・頼むな、キャロ。」

エリオは無視。

「はいっ！」

「アウルさん！？」

「よしつ。ヴァイス、ハッチ解放！出撃するー！」

「了解つす！兄貴！」

「高町。先に出るぞ。後に続け！」

「了解！」

「ロングアーチ05、アウル・シュタインブルグ。出るぞっ！」

さて、敵さんをお出迎えするとしますか。

s i d e o u t

なのは s i d e

アウルくんが出撃した後、私もキャロに言った。

「キャロ。キャロは一人じゃないよ。離れていても通信で繋がってる。みんなで助け合える！アウルくんはああ言ってたけど、すぐに助けに来てくれるよ。それに、キャロの魔法は、みんなを守つてあげられる、優しくて強い魔法なんだから。頑張って！－」

「はーい！」

うん。キャロも緊張が取れたみたい。

「スタートゼロ一、高町なのは。いきますっ！－」

私も出撃して、アウルくんの後を追う。

「お待たせ。」

「遅いぞ。敵との接触まで、後2分だぞ。」

「わかつてます。アウル副部隊長。」

「……あいつらは大丈夫か？ キヤロは特に。」

「任務中でしょ。私語は慎んで下せ。」

「わかつてるが……。」

「ふふふ。」

いつもは素っ気ないのに、ちやんとみんなの事は心配してゐるんだね。  
変わらないな。

「……笑うな。」

「やつぱり、素直じゃないよね。みんなにもやつぱり接すればいいの！」

「ワシもやつぱり言つてるのだが……頑固だな。」

「やつぱりですね。」

( レイジングハート )

「やつぱり……。」

でもやつぱりだね。アウルくんは何だか私達とはまだ距離を置い

てこる気がするのは。

s i d e o u t

アウル s i d e

「第一派、二個編隊40機来るぞ。」

ローハングリンが敵の接近を知らせる。  
目視でも確認出来る様になつてきた。

「高町。」

「え・・・・は、はい！」

「どうした？もうすぐ戦闘だぞ！しつかりしろーー！」

「すいません。」

「ならない。敵編隊への砲撃を頼む。位置は、第1編隊中央より左  
5度だ。」

「了解！レイジングハート。」

「わかりました。」

「デイバーン・バスターツー！」

なのはの砲撃が敵編隊に直撃して6機撃墜する。スゲエなおい。

すると、第1編隊が4機と10機に別れ、第2編隊は10機ずつに別れて包囲してくる。クソツ！面倒だなおい。

「高町は左翼前方4機を突破せよ。俺は右翼前方10機を突破する。  
ローエングリン！！」

「うむ。ソニックフォーム、スタンバイ。」

すると、ローエングリンが双剣になり、バリアジャケットも黒のジヤケットとズボンとなる。機動戦を重視したフォームだ。  
俺は敵編隊に“フラッシュユームーブ”を使い接近する。この魔法は、“ソニックムーブ”よりも数段速度が落ちるが、高速移動中でも戦闘が可能な点で俺はよく利用する。

飛行型に次々と接近して撃墜していく。因みに、突破までに7機撃墜した。なのはも更に4機撃墜したようだな。

「アウルくん！前から20機接近中だよ！」

なのはの言つ通り、第2派の20機が接近中だ。

「よし。予定通りだ。前方の編隊を吹き飛ばす！ローエングリン！  
フルドライブ！…」

俺はエセ鬼斬り（？）の態勢で待機する。

「魔力圧縮、完了した。」

「“風刃乱舞”！？」

双剣を振るつと、ローエングリンから突風が発生して、前方の飛行型の編隊を襲い、突風の中にあつた無数の魔力刃によつて、前方の飛行型は全機撃墜した。

「・・・アウルくんつて、ホントにベルカ式?」

「後ろの編隊が来るぞ。気を抜くな。」

「ゴメン! 遅くなつた!」

フェイドがやつて來た。これで大技は使わなくてすむな。

「よし! 残りの奴らを蹴散らす! 敵増援を考え、魔力消費は極力抑えろ! ! !」

「「わかつた!」」

「制空権は確保出来た様だな。新人達は?」

「どうやら、上手くいつとるみたいだぞ。リニアの制御システムはまだ奪還できておらぬようだが。」

「そうか。」

『高町、ハラオウン。この空域の監視を頼む。俺は新人達の援護に向かう。』

『わかつた。』

『氣をつけてね。』

俺は、リアの援護に向かっていたのだが。

「新井を破壊せん！」  
現在、三つ子の軍が、新井に

何!? ケンッ! 急ぐぞ!! ロンクリン!!

「ねかこでおNの!!」

全速力で向かっていると、エリオが新型のアームで崖へ投げ出されているのが見えた。

エリオ！？

俺は、また守れないのかよ!!? チケシミ!!

sideout

キヤロ Side

私達は順調にガジェットをやつつけて、レリックのある車両までもうすぐのここまで来たの。

このままレリックまで行けると思ってた。

すると、いきなり前の車両から何本かのアームが私達を襲ってきた。

# 「ガジェット！？」

「大きい！」

こんなに大きいガジェットなんて知らないよ！

「僕がいく。」

「気をつけてね！」

エリオ君がストラーダで斬り付けるけどガジェットは傷一つない。

「なんて硬さだ！」

エリオ君が攻撃してきたせいなのか、ガジェットがAMFを開けた。

「AMF！？」

「こんな遠くまで！！」

これじゃあ、ブースト魔法も使えないよ！

「うわあっ！！」

ガジェットのアームでエリオ君が壁に叩きつけられ氣絶した。そして、そのまま崖に投げ出された。

「エリオ！？」

ふと、微かに声が聞こえた。アウルさんが必死になつて、こつちに向かつて来ていた。顔を見るとただ助けたい、そんな気持ちが見え

た。いつも私達に厳しいアウルさんはあんなに必死で守りとじて  
いる。

嬉しかった。アウルさんはいつも私達の事を想つてくれていること  
が。

守られるだけじゃ嫌だ！私もみんなを守りたい！

私は、リニアから崖へと飛び降りた。

s i d e o u t

アウル side

「キヤローーー！」

『アウル三佐。援護はいらへんよ。』

「どうしてですかー！」

『キヤロの竜召喚見たないんか？』

「あ・・・・・・。」

『やつぱり忘れとつたか・・。ほら、見てみい。』

見てみるとキヤロがフリード（テカベー）を召喚したとこだった。  
――!?俺、心配損ですか？コラ、グリフィス笑うんじゃねえ  
――!

『せっぱり、アウルは変わらんない（笑）。』

・・・・・あの、泣いてもいいですよ？男だって泣いてもいいですよ！

「構わんさ。任務が終わってからならな。」

レリックを確保した俺は、引き継ぎ任務に着く事にした。

「アウルさん。」

「キャローピングか？」

「私決めました！守るために力を使いつて！」

「そうか。」

「それから・・・お兄ちゃんって呼んでいいですか？」

「え？いや、何で？」

「ダメ・・・ですか？」

何！？この歳で上目遣いで涙を瞳に溜めて見つめできやがるー。

「わ・・・分かった。ただし、任務中はダメだ。」

「はーいーお兄ちゃん！」

「まら、任務に戻れ。」

「うんっーえへへ。」

嬉しそうにキャロは任務に戻つていく。

「アウル。」

「フェイトか。」

「羨ましいな。あんなに嬉しそうなキャロ、久しぶりに見た。」

「・・・・お前は不器用だな。」

「アウルには言われたくない。」

「ちやんと話しあつてみろよ、親子揃つてさ。」

「でも・・何を話せばいいの?」

「何でもいいんだよ、些細な事で。時間が無いなら、仕事手伝つて  
やるからちやんと話しあえ。」

「うん、わかった。有り難う、アウル。」

「つたぐ、分かつたなら早く任務にもど・・・。」

「どうしたの?」

視線を感じる。監視されているのか？

気配を探っていると、左前方の空に光が少し反射されている場所がある。

「そこ」かつ！

ローハングリンから魔力刃を飛ばし破壊する。

「え？」

「警戒レベルを上げろ！ 司令部にも通達！ 他にもサーチャーがあるかもしけん、見つけ出せ！」 監視といつよりは観察に近いな。しかし、誰が。

そんな事を考えつつ、現場に指示を出した。

s i d e o u t

マッドさん s i d e

「サーチャーが破壊されました。」

「その様だね。他のサーチャーも引き上げさせてくれ。」

「よろしいので？」

「構わんさ、データは十分に採れた。これ以上は労力の無駄だ。」

「わかりました。」

「しかし、実に素晴らしい。興味深い素体が揃っている。そして・・・

・生きて動いている“プロジェクトF”の残滓に会えるとはね！最高の気分だよ！」

「それだけですか？ドクター。」

「ああ、“紅い刃”までいるとは思わなかつたよ。しかも、私特製のサーチャーを見つけ出す程の実力とは恐れ入る。早急に対策を考える必要がありそうだ。」

「でも、愉しそうですね。」

「困難な壁を乗り越えるのは、科学者としての使命だと私は思つてゐる。實に愉しみだよ！フハハハハハ！アーハハハハハツー！」

（ダメだこの人。）

side out

## 第7話（後書き）

お知らせです。

メインヒロインをなのはにしようかと思います。

理由は、ヴィヴィオのパバイベントが欲しいからです！！それ以外だと考えてもアイデアが出て来ない！

でも、アイデアが浮かんだら、必ずそれぞれのルートを作成したいと思っています。  
所謂、引き延ばし作戦です。

こんな作者ですが、よろしくお願ひします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2060ba/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS 紅い刃を持つ男

2012年1月14日16時48分発行